

不祥事

激戦区

相馬健が事務部に転勤して二カ月が経った。

1

もう十月だ。東京駅前にある東京第一銀行十階にある相馬のデスクから、秋の日差しを浴びている八重洲側の街並みが見える。分厚い窓ガラスに遮断された光景はひたすら静かで、ここに転勤してくるまで耳の垢のようになじりついていた支店の喧噪も、殺伐とした雰囲気もない。無論、誰とはいわれないが自分に楯突く部下もなく、「課長代理」から「調査役」へと肩書きが変わっただけで——職給こそ同じだが——少々偉くなった気もする。

相馬はかつて大店で活躍する融資係として名を馳せた男だった。それが、課長代理

昇格とともに転動した赤坂支店で当時の副支店長とぶつかったことから目の敵かたきにされ、次の転動で営業課に回された苦い過去がある。

銀行という職場で、一旦いったんついたバッテンはなかなか消えない。

人事権にものをいわせ、人生を台無しにしてくれた副支店長のことを考えると今でも勝はらわたが煮えくり返るが、結局、組織では強者の論理がまかり通るのだ。

あれから五年。次のポストは融資本部間違まちがいなしといわれていた相馬が辿たどつたのは、意に添そわぬ屈辱の職歴といつていい。

だが、そうした日々も終わりだ。

支店長にはバカにされ、副支店長に嫌味をいわれるうちに随分と同期入行の連中に抜かれた。出世競争からは落ちこぼれたが、念願かなって本部調査役の椅子いすに座つてみれば、全ては過去のこと。いま相馬の胸には晴れやかな気分が広がっているのだた。

デスクの電話が鳴った。次長の芝崎太一しばさき たいちからだ。

「ちよつと部長室まで来てもらえますか」

相馬は支店時代では考えられない優雅な仕草でデスクの上を手早く片づけると、同じ階にある部長室へと急いだ。

「どうだろう相馬君、臨店りんてんの仕事は慣れただろうか」
勧められるままにソファにかけた相馬に、部長の辛島伸二朗からしましんじろうがきいた。

「はい、なんとか。それにしてもいろいろな支店の事情があるものだ」と勉強になりま
す」

相馬の肩書きは、詳しくいうと事務部事務管理グループ調査役である。営業課の事務処理に問題を抱える支店を個別に指導し、解決に導くのが主な仕事だ。

「それは良かった。ところで最近の支店動向を見てみると業務の習熟度が低い行員が増えたせいかな事務ミスが目立つ。そこで提案なんだが、できれば臨店指導で女子行員たちの意見をもつときき出せる体制をつくってはどうかと思うのだが」

「ああ、それはいいお考えだと思います」

心から相馬はいった。「私が本部調査役として臨店すると、支店の行員はやはりどこか警戒するとかいうか、うち解けて話してくれないことがあります。本音をきき出すいい方法はないかと私も考えていました」

我が意を得たり。辛島は相馬の反応にうれしそうな顔をした。

「そうか。君のことだからたぶんそういつてくれると思つたよ。どうだろう、君にひとり部下をつけるから、しばらく二人で担当してみてもは」

「私に部下、ですか」

相馬はぼつと顔を輝かせた。いま、相馬には部下はいない。代々木支店で二人の部下はいたものの、そのうちのひとりにはひどいはねつ返りで上司を上司とも思わない女子行員だった。

ふと、思い出したくもない名前を相馬は思い出し、顔をしかめる。

狂咲——いや花咲舞。

あいつには随分とひやひやさせられた。転勤してこの二カ月、なんと心休まる銀行員生活であることか。

「ありがとうございます」

心から相馬がいうと、満足したらしい辛島は大きくうなずき、「実はもう人選を済ませて正式な辞令を出してある。支店で三日間引き継ぎをしてもらった後に当部へ来てもらうが、その前に挨拶に来てくれたので君に引き合わせようと思つてね」

辛島の言葉が終わらないうちに、背後のドアが二度ノックされ、部長秘書が顔を出した。

「ああ、来た来た。どうぞ入つてくれるようにいつてくれ」

どんな部下だろう。相馬は期待に胸を膨らませた。「こちらが相馬調査役だ。相馬

くん、紹介しよう」

相馬は、油断するとゆるみそうになる頬ほおを引き締めた。立ち上がって、斜め後ろに慎重しく立っている人物を振り向く。

「相馬で——あつ！」

相馬は叫んだ。「く、狂咲！　なんでお前が——！」

思わず部長を振り返ると、辛島はきよとんととして相馬を眺め、「あ、そうか」と膝ひざを打った。

「そういえば、君は代々木支店から来たんだつたな。なんだ、じゃあわざわざ紹介することもないじゃないか。これから君の部下になる花咲舞さんだ。君も知つての通り、優秀な人材だぞ。全店の中から選ばせてもらった。まさに激戦を勝ち抜いたエリート・テラーだ」

啞然あぜんとして言葉もない相馬に、舞がにつこりと微笑ほほえむ。

「ふつつかものですが、よろしくお願いします」

愕然がくぜんとした相馬の横に舞が並んでかけるのを待つて、次長の芝崎がいった。

「花咲くんには、こちらに転勤次第、さっそく臨店指導をもらうことにする」

「いきなりですか」と相馬。嫌な予感がする。部長は事務部への転勤が難関だったよ

うな口振りだが、どこをどう評価するとよりによつて花咲が選ばれるのか、評価基準をきいてみたいものだ。本当は代々木支店から体ていよくやつかい払いされたんじゃないか。

「ま、転勤してきてすぐというのも花咲さんにはきついかもしれないが、放つては置けない事態になつている店があるのでそのつもりでいて欲しい」
そういつて次長が出したのは、自由が丘支店長から事務部長宛あての書簡だった。

「本店で惹起じやつきした誤払いに関するご報告」――。

「どういうことですか？」

相馬は次長の苦り切つた顔を見た。

2

自由が丘支店は、東京第一銀行の中でも特に忙しいことで知られる支店の一つである。華やかなファッションの街という表向きとは裏腹に、狭いエリアにメガバンクがひしめき、鎬しのぎを削る金融激戦区だ。

東京第一銀行では、各エリア毎ごとに競合銀行との勝敗付けをしているが、この九月ま

での自由が丘支店は「惨敗」。他行自由が丘支店が融資、運用商品とも伸ばす中、それにシエアを食われる形で業容を縮小していた。

「結果が全てとはいわないが。いま一、いや、いま二かいま三ぐらいだ」

事務部の一室で、相馬は難しい顔をしていった。ミーティング・テーブルの向こう側には代々木支店での引き継ぎを終え、その日から事務部に転勤してきた花咲舞がいる。舞は部長以下、関係者への顔見せをし、事務部全員の前で着任の挨拶をつい今し方終えたばかりで、顔を上気させていた。やる気満々である。

「でだ、我々の仕事だが」

相馬は話題を自分たちの仕事に戻した。「自由が丘支店の営業課は前期惨憺たる内容だった。口座相違二件、現金紛失一件、誤払い一件、行内検査での再検査一回、フアイリング検査での再検査一回、お客様相談室への苦情三件、営業課員の予定外退職者三名、内一名は四月に入ったばかりの新人が六月に退職した。さらに、誤払いについてはお主も知つての通り、裁判沙汰になつて敗訴濃厚ときている」

「誤払いたした金額は？」

「三千万円」

ふう、と舞は大きなためいきをついた。

誤払いとは、読んで字のごとく、誤って払うことをいう。つまり、本来、払い戻しではならない状況で、相手に預金を払い戻したということだ。

「百聞は一見に如かず」

相馬はいつて席を立った。午前九時半。自由が丘支店には十時半の約束だ。「行く」

山手線で渋谷まで行き、東急東横線に乗り換えた。自由が丘支店は、自由が丘駅のロータリーに面した好立地だ。

「支店の歴史も古いし、この立地だけ。それなのにあいつらに負けるんだもんなあ」相馬が指さした方向には、競合他行のいなほ銀行とUBJ銀行の看板が見える。

月半ばということもあって閑散としたロビーに入ってしまった相馬は、店頭の窓口にいる女性に「事務部ですけど」と告げた。

今日から事務部の臨店指導があることは支店にすでに伝えてある。相馬の背後にいる舞にちらりと視線を向けた彼女は、背後のデスクにいる男に来訪を告げた。営業課長の中西穰だ。

「やあどうも。よろしくお願ひします」

作り笑いを浮かべて近づいてきた中西は、相馬と舞を二階にある応接室へと案内した。愛想良くしているが、営業課の惨憺たる内容をみれば管理者としての中西がどんなレベルかはわかる。

「いやあ、わざわざ指導をいただかなきゃいけないなんて、お恥ずかしい。いくらいつてもきちんとできる人材がいなくてねえ。私もほとほと困り果てていたところですよ」

応接室のソファにかけると、案の定中西は事務の不祥事続きを部下のせいにした。「人事部の意見もききました、自由が丘支店さんだけに人材の偏りかたよがあるということはきいていません」

相馬はいい、暗に「部下のせいにするんじゃないやねえぞ」と牽制けんせいする。中西から愛想笑いが消えた。

「そういわれると、困ったな……」

頭をかけた態度とは裏腹に、目は笑っていない。

「ええと、臨店のご挨拶をしたいのですが、支店長さん、いらつしやいますか」

相馬がきいたとき、応接室のドアが派手にあいて支店長の矢島俊三しゅんぞうが入ってきた。

バーでいい寄られたらくらつききそうな、長身でスマートな男である。自由が丘支店

の支店長になったのは去年の七月。それまでは本部畑が長く、同期トップで昇進を果たしたエリート支店長だということはきいていた。

「ごくろうさま」

温厚な物腰で笑顔をみせた矢島には、支店長の威厳というより、人なつこい表情がよく似合った。

「なにしろ激戦区にある店なものですから、なにかと大変なことも多くて。ただ、事務面での不手際は言い訳のしようがありません。どうか三日間よろしくご指導ください」

そういつて、相馬と舞に頭を下げた矢島は、弁舌もさわやか、腰の低い人物に見える。

「それでは早速、営業課にご案内してくれたまえ」

中西に命じ、相馬と舞に矢島は笑顔を向けた。「なにか不都合なことはありませんら、なんなりと申しつけてください」

だいたい本部から臨店してくる者に対して支店の扱いは丁重だが、矢島のそれは気持ち悪いほどだ。だが、非協力的な態度をとられるよりはそのほうがずっといい。中西について営業課に降りた相馬と舞は、さっそく臨店指導の仕事に取りかかった。

「ありがとうございます」

業務終了とともに、会田^{あいだもえ}萌はぺこりと頭を下げた。

その場をぱつと明るくするような笑顔の持ち主だ。彼女は営業課テラーの中堅、短大卒の入行四年目、二十四歳。

自由が丘支店の営業課は、普通預金などを扱う店頭グループと振込を専門にする^{かわせ}為替グループ、運用商品を販売する相談グループの三つのグループに分かれていた。

営業課は全部で十二人。人数が少ない分は、十人ほどのパートさんで補っている。

「とても勉強になりました」

という萌の事務能力は、舞の感想で六〇点。元気はよくて顧客のウケはいいが、数字のチェックが少々甘い。伝票処理の手順にもばらつきがあつて、ミスが出やすい。

気づいたことを指摘した舞は、「でも、スジはいいから頑張ればすぐにできるようになるよ」と励ました。

午後三時の閉店から四十分が経過している。

営業課が一日の終結に急速に動き始めてるときだ。資料を見て、相当ひどいと覚悟してきたが、実際に彼女たちの能力は思ったより低くない。要は、経験不足だ。どこの店にもいて、みんなから頼りにされているベテラン行員が自由が丘支店には少ない。というか、ひとりしかいない。入行十八年目の内村恵めぐみだけだ。

その内村は、隣の窓口でどこか胡乱うろんな横顔を見せていた。

「内村くん」

そのとき背後から声がかかり、内村はびくんと体をこわばらせた。中西がどこか陰気な感じのする男と並んで立っている。最初舞たちを迎え入れたときの愛想の良さはかけら欠片もない。

「誰？」

中西の隣に立っている男の不機嫌極まる表情を眺めて、萌にきいた。萌も表情を曇らせて、「法務部の高島調査役です」とこたえる。

「法務部？」

「裁判になってるんです」

声を潜めた萌の説明で納得した。

「例の誤払いの件ね」

おずおずと立ち上がった内村のことが気にかかる。

「彼女が誤払いを？」

「そうなんです。もうかなり参ってるらしくて。また辞めちゃうんじゃないかしら」

「また？」

萌は顔を曇らせてうなずいた。

「去年から何人も辞めてるんです。しかもベテランばかりで」

たしかに、退職者が多いとはきいていたが、現場行員の口からきくと、切迫したものを感ずる。

もう少しじっくり話をききたいと思った舞は、「もし予定がなければ食事でもしない？」と萌を誘った。

「ぜひ、お願いします」

「だったら早く片づけよう。自由が丘だったらおしやれなお店がたくさんあるでしょう。私、それも楽しみにしてきたんだ」

「まっかせてください！」

小柄な萌は、小さな胸をぽんとたたいて元気良く笑った。

萌の案内で、南口にあるイタリアンの店へ行つた。

マリ・クレール通り沿いにあるおしゃれな店だ。普段、安焼鳥屋にしかいかない相馬は、最初居心地が悪そうにしていたが、グラスワインで酔いが回りはじめると、いつもの軽口を連発しはじめる。きき飽きた冗談の連発にしばし耐えた舞は、話題を支店での仕事に戻した。

「お店には確かにベテランが少ない気がするんだけど、みなさん『寿退社』でもしたの？」

萌は、同僚の神田美歩と顔を見合わせた。

美歩は、萌のひとつ上の先輩だ。眼鏡をかけた表情の中で、生真面目そうな瞳が舞を見ている。

「結婚退職された方はいません。実は、そこに問題があると思うんですけど」

彼女なりの問題意識を反映した遠慮がちな声だった。「居心地が悪くなつたんだと思います」

「居心地が悪いつてどういうことだい」

相馬の質問に、返事はなかなか返つてこなかった。話していいか逡巡しゆんじゆんしている様子に、「あのね、お二人とも。これはオフだから、気にしないでいいのよ。支店に告げ口したりしないし、この調査役にしたところで、酔っぱらってるから次の日まで覚えてるかどうかも怪しいものよ。」

「狂咲、てめえ」

文句をいいかけた相馬の足をテーブルの下で、がん、とけりつける。

「イテッ！」

「話してくれる？」

口を開いたのは、萌のほうだった。

「あまり大きな声ではいえないんですけど、みんないじめにあつて……」

「いじめ？」

足をさすっていた相馬がきよとんとした顔になってきいた。「どういうこつた、そりゃ」

「いじめつて、誰にいじめられたわけ？ 新人がそうなるのならまだわかるけど、みんなベテランだったんでしょ。ベテランがいじめられたつて話はあるきかないわ

ね」

「課長なんです」

美歩がいった。

「課長だつて？ あの中西さんが、いじめたわけ？ まあそういえば、多少陰険な感

じはしたが……」

相馬の感想をきき流し、舞はきいた。

「具体的にはどんなふうにいじめられたんだろう」

「たとえば、キャンペーンの獲得目標を設定するときに、とても達成できないような目標を貼^はり付けるんです。それでできないと、朝礼でムダな人件費を払^はつてるみたいなこといわれたり」

萌は続けた。「とにかく、ことある毎に目の敵にしているような感じだったんですよね。ものすごく課の雰囲気も悪くなつて……」

「中西さんか。今日見た限りでは、そんなふうには思えなかつたけど」

「でも、内村さんを見て、なんとも思いませんでしたか、花咲さん。いまあの方が標的なんです」

萌にいわれ、舞ははつとなつた。内村恵の沈痛な表情が胸に浮かんだ。

「裁判のこともありますが、この半年近く、ずっといじめを受け続けてるんです。もう見ているほうも暗い気分になっちゃうんですよね」

美歩も同意してうなずく。

「たしか、去年だけでベテラン行員が三人、退職したんだったね」

真面目な顔にもどって相馬がいった。「申し訳ないが、こつちの資料には退職理由までは書いてなかった。でも、いじめが理由だとすると問題だな、なあ狂咲」

その言葉をきいて、萌と美歩は顔を見合わせる。

「あの、さつきから気になっていたんですけど、狂咲って、花咲さんのあだ名なんですか」

「あだ名っていうかき、こいつキレるとおつかないから、花咲をもじって狂咲って呼ばれてんの、あんたたちも気をつけたほうが——イテッ！」

涼しい顔をして足を組み直した舞は、疑問を口にした。

「中西課長はなんでそんなことするのかしら」

「課長自身は、ベテランがすっかりしないとつて口癖のようにおっしゃってましたけど」と美歩がいった。

「要するに、いじめじゃなく、叱咤しつた激励だっただけか？」と相馬。

「そんなのが激励なはずない」

舞は断言した。「退職しなきゃならないぐらい追いつめられるのが激励？　行き過

ぎよ」

「だけどさ、ちぐはぐな気がするんだよな」

相馬は腑に落ちない顔でいった。「ベテランがたくさん抜けて、結局、自由が丘支店では事務過誤が頻発したわけだろ。挙げ句の果てに、裁判沙汰だ。結局、課長は自分で自分の首を絞めたようなものじゃないか。そこまで、読めなかったのかな、中西課長は」

「すみません。私たちがしつかりしてなかったために……」

しおれた美歩を見て、舞も手を横にふった。

「人間である以上、ミスは必ずする。たしかに、ミスをしたのはそのひとの責任かもしれない。だけど、銀行のような組織で、これだけのミスが重なるのは、個人だけの責任とはいえない。管理に問題があるとか思えないわ。明日、私から中西課長にきいてみましょう」

舞の言葉に、相馬はたじろいだように唸った。だが、美歩と萌は、頼もしい味方を見つけたときのように目を輝かせた。

「いじめ？ なんのことかさつぱりわからないね」

舞が中西と対峙したのは、翌日の業務終了後のことであつた。営業課の片隅にある小部屋で、中西は木で鼻を括つたような態度を見せている。

「退職したのは、勤続年数でいうと十八年がひとり、十五年が二人。いずれも、かなりのベテランだつたときいています」

「だから？」

中西はタバコに点火すると、天井に向かって吐き出した。粗品が積んである部屋の中央にテーブルと椅子を置いただけの部屋だ。壁には、「禁煙」の貼り紙がある。中西はそれを無視していた。

「二十年近く勤めた人が、職場を去る。きつとつらかつたでしょうね」

「ベテランだから？ あのね、花咲さん、ベテランだからって、重宝なことばかりじゃないんだよ。君にはそういうことはわからないかもしれないが」

「どういうことでしょう。はつきりおっしゃってください」

だが、中西ははつきりとは^{こた}応えなかつた。「まあ、あなたの仕事は事務指導だから、それをメインにやってくれたらいい。余計なことは考える必要も知る必要もないわけだから」

「お言葉ですが、ベテラン不在が、結果的に事務の混乱を招いたと思いませんか」

だが、中西はそんな舞の指摘を鼻で笑った。

「それは違うでしょ。営業課の仕事なんてね、誰だつてできるんです。おかげさまで当行にはしつかりしたマニュアルもある。わからないことがあれば、それを読めばいいんだ。違いますか。長く勤めた人はたしかにいなくなつた。だけど、優秀な新人はたくさん入ってきたじゃないですか。見ててごらんなさいよ、あと半年もしないうちに彼女たちは辞めていったベテラン以上のレベルになるから」

舞は中西を睨^{にら}み付けた。

確かに、彼女たちには可能性があるだろう。だからといって、いじめ同然の措置でベテランを追い出す中西の考えには同意することはできない。いま新人でも、いつかはベテランになる。彼女たちはバカじゃない。十年後、十五年後の自分の姿を、辞めていった先輩に重ねるだろう。

「ベテラン、ベテランつて、大きな顔をしてるけど、それほど大した事務レベルにあ

ったわけじゃない。余計なコストがかかるだけだ」

ふと、いい過ぎたと思ったか中西は口を閉じた。「コスト」という言葉が、舞の胸の中へ重く沈んでいった。

「女子行員はコストですか」

中西は、その言葉を自分への挑戦とでもとったか、敵意を滲にじませた。

「コスト？ 当たり前でしょ。あなただつてそう。私だつてそうだ。経営とはときに冷徹なものさ。あんたにはわからないだろうがね」

利いたふうな口ぶりだが、そういうあんたはわかっているのかと、問い返したい衝動に駆られる。

「なるほど。よくわかりました」

だが、舞は立ち上がり自分を睨み付けている相手を残してさつきとその小部屋を後にした。いまこの男と議論しても始まらない。

「おい、どうした。そんな顔して」

出てきた舞に、相馬はきいた。

営業課の片隅にあるワークデスクだ。そこに、相馬は様々な資料を並べて眺めていた。

「なにしてるんです」

「前期、この店で起きた重大過誤がどんな状況で起きたか分析してるわけよ。そこになにか事務向上のヒントがあるんじゃないかと思ってるな」

「これは……？」

舞はふと手近な書類を取り上げた。

三千万円の誤払いの資料だ。

裁判になっているだけあって、原伝票はなくコピーだ。定期預金の払出請求書には、内村の印鑑が捺^おしてあった。

振り向くと、内村のやせこけた背中が見える。舞はため息をもらした。これは経験の浅い新人ではなく、ベテランの内村のミスだ。そう考えると、ひたすらベテラン行員をこき下ろした中西の言葉にも一理あるような気になる。自身、ベテラン行員である舞は、不愉快な思いに唇を噛^かんだ。

伝票に印刷されたコンピュータの印字が見える。それを見た舞は、「あら」と小さな声を上げた。

「どうした？」

「いえ。誤払いというのは、てつきり余計にお金を支払ってしまったと思っただけです」

けど。違うんですね」

「要するに過払いしたと？ 違うね。その伝票からわかるのは、三千万円の定期預金を解約依頼してきた客に、三千万円を払い出したということだけだ」

「じゃあ、なぜこれが誤払いになるんですか？」

「なんでだと思おう？」

すぐにはこたえず、相馬はきいた。めずらしく重々しい顔になり、舞を見つめる。

「もしかして、これ——」

「そう。盗まれた通帳と印鑑を使って、払い出されたんだ。本来なら見破るべきところを、彼女は見過ごした。ミスだ」

「ミス？」

舞は伝票を手にとって見つめた。個人の客だ。会社ではない。

「印鑑票を見てみるよ。そのファイルの中にコピーがあるだろ」

黄色い二つ折りファイルを開けた舞は、中から印鑑票を取り出した。印鑑票とは、定期預金を作成するときに登録する印鑑と住所、氏名などを記録した台紙である。預金を払い出すときの印鑑照合は、専用機に登録された印鑑票の印影で行われる。

舞は平面照合と呼ばれる手法で、簡単にそれを照合してみる。コピーの場合、多

少、印影のズレが出るが、二つの印鑑は同じものだった。

しかし、誤払いというからにはどこかにミスがあるはずだ。

よく見ると、間違っているのは印鑑ではなく、住所だった。目黒区内の住所だが、印鑑票の「緑が丘」が、払出請求書では「緑ヶ丘」となっている。「が」と「ヶ」。細かいところだが、ミスはミスだ。そこに住んでいる本人であれば、住所を誤記するはずはない。

「犯人は盗み出した通帳と印鑑で現金を引き出しにきたんだ。当店の内村が対応したとき、彼女は、払出請求書に記載された住所が間違っているのに気づかなかった」

これが満期をむかえている定期預金なら、住所を書いてもらったりはしない。それなのに、ご丁寧に書いてもらっているのは、それが中途解約だからだ。東京第一銀行にかぎらず、たいていどの銀行でも、定期預金の中途解約を受けつけるときには、住所と本人を確認するための書類の呈示を求める手続きになっている。

また、本人確認資料として内村は健康保険証の番号を控えていたが、それも問題だった。

「保険証か……」

「ちよつと弱いよな」

舞のつぶやきに相馬がいった。「本人の写真が載っているようなもの、たとえば免許証の提示を求めれば預金の払い出しを未然に防ぐことができた」

「裁判の争点はそこですか」

相馬はうなずいた。

「相手の主張としては、住所が違っていたということ、それに保険証だけしか確認しないで払い出したこと、このふたつの点で銀行には過失があつたということだ。まあ、同様の判例もあつて、残念ながら敗訴濃厚だ」

もし敗訴すれば、銀行は三千万円の損が出る。

「致命的なミスだな」

そういつて相馬は、いまま窓口に出ている内村を見たが、払出請求書には、内村の印鑑だけではなく、中西の印鑑も捺してあつた。

三千万円もの金額になると、係員が独断で払い出すことはできない。営業課長の承認がいることになつてゐるのだ。

「課長が承認している以上、内村さんだけの責任じゃないと思いますけど。課長だつて、この伝票を見ているはずだし、保険証で本人確認したことは認めているはずですよ。であれば、責任の半分は課長にあるんじゃないんですか。それをあたかも、内村

さんひとりが悪いようない方をするなんてひどすぎます」

「まあ、そう怒るな」

舞をなだめ、相馬はふと思い出してきいた。「それより、なんだったんだ。中西さんはんは」

「それです。きいてください」

最初興奮して話し始めた舞だが、中西との話を振り返るうち、ひとつ気になることに気づいた。

「相馬調査役、ちよつと調べてもらえませんか」

「調べるつてなにをだ」

「課長の話に出てきたコストの件ですけど、そこまでいうのなら、実際、辞めていったベテランがどれぐらいコストがかかっていたのかなと思って」

「要するに、その彼女たちの人件費を調べろつてか」

「お願いします」

頭を下げた舞に、相馬はため息まじりにいった。

「わかったよ。そこまでいうのなら、今日、本部に戻って調べてやる。でも、そんなものどうするんだ？」

「ちよつと知りたいです。もしかしたら、そこに自由が丘支店の事務を崩壊させた根本的な理由があるのかもしれない」

舞はいうと、それ以上、相馬がなにをきいても口をつぐんでしまった。

6

「ほらよ。これが去年の行員リストだ。退職者には印をつけておいた。年俸については俺の推測だ」

相馬が、昨年中に自由が丘支店を退職した三名の女子行員について調べてきたものを舞に見せたのは、翌朝のことであった。

「やっぱり、そうだったんだ」

つぶやいた舞に、「なんだよ、いつたい」と相馬は不満そうにきいた。調べものはしたものの、目的について口を割らない舞に、多少、腹を立てているらしい口吻だ。

「見てください。退職したベテラン女子行員全員が四級職なんです」

「なんだと？」

舞の指摘で資料を覗き込んだ相馬は、「ほんとだ」といって顔を上げた。

「で、これがなんだ」

このひとなにも考えていない。

「コストですよ、コスト」

舞は焦じれたくなつていった。「中西課長は、給料の高い四級職の女子行員を辞めさせてコスト削減を狙ねらつたんだと思います」

「まさか」

啞然とした相馬は、つぎの刹せつな那、真面目な顔に戻った。「たしかに、一支店に三人の四級職は多すぎる気もするな」

東京第一銀行の職給は一級から始まり、一般職採用の女子行員の場合、四級職が最高職級になっている。入行して一年経つと二級になるが、その先、三級職になるときに選抜され、さらに四級職にまで昇りつめるのはごく少数の精鋭に限られる。その意味で、自由が丘支店の女子行員がかなり優秀だったことは容易に想像がついた。だが、優秀な彼女たちには、それなりのコストがかかる。多少の事務正確性を犠牲にしても、中西はそれを解消しなかったのではないか。

「いじめの目的が、彼女たちを辞めさせることだったとしたら、やり方が汚すぎます。五年以上も勤続した女子行員にとって、こんな形で銀行を去らなきやならないな

んで、どれだけ悲しいことだったかわかりますか？」

沈鬱ちんうつな表情になって相馬は、「お前のいうとおりだ」という言葉を喉から押しだし、唇を嚙んだ。

「だけど、しょうがないっていうんでしよう。それが銀行って職場だから。収益優先だから。人事は支店の裁量にまかされているから」

「おいおい。そう俺を責めるなよ」

きつと睨まれた相馬は、情けなさそうに眉まゆを垂れた。

「でも、私たちにもできることはあると思います」

「できること？」

「自由が丘支店の事務過誤がなぜ頻発しているのか、その理由がわかったわけですから、断固、こうした支店経営について糾弾すべきです」

「支店経営は大きさだろうよ」

舞はあきれ顔で相馬を眺めた。

「調査役、こんなことを中西課長が独断でやると思いますか。普通なら、三人もベテランが辞めたら、管理職として責任を問われる場面でしょう。それをあのひとが平然としらをきっていられるのは、それなりの後ろ盾があるからに決まってるじゃないで

すか」

そのとき、「どんな具合ですか」と背後から声がかかった。

振り向くと、温厚な笑みを浮かべた矢島が立っていて、真剣に話し合っていた舞と相馬を見下ろしている。

「いま、支店の問題点について話し合っていたところですよ」

立ち上がった舞の言葉に、矢島の笑顔がすつと消えた。相馬が顔をしかめたのがわかったが、無視した。

「ほう。問題点とは具体的にどんなことだろうか」

「講評は明日の予定ですから、その席で」と舞。

「いまきかせてくださいよ。もつたいぶることはないじゃない」

舞にかけるようにいうと、矢島も隣の椅子をひいた。営業室のかたすみにあるミーティング・ブースだ。矢島の視線がすばやく行員リストの上を滑っていく。温厚な表情はひっこめられ、険しいなにかがその瞳の中に滑り込んできていた。この男の本当の姿がいま垣間見えた。舞はいった。

「別にもつたいぶるつもりはありませんから申し上げます。昨年、ベテランの女子行員を辞めさせたのは失敗だったと思います。そのために支店の事務レベルは低下し、

様々な問題を引き起こしています」

「一時的なものでしょ」

矢島はそつけない。「それに、辞めさせたんじゃないやなくて、退職は彼女たちの自己都合ですよ」

「自己都合？」

関係ない、とでもいいたそうな口調に舞は腹が立った。「本当に自己都合だとい切れますか、支店長。辞めていった女子行員たちにだって、守るべき人生があるんですよ。それがわかりますか」

刹那、矢島の顔にはつきりと怒りの表情が浮かんだ。

「なにいつてんだ、君は」

「すみません、支店長」

相馬が割って入った。「ちゃんとした講評は明日、させていただきますから」

なにかいおうとする舞を押しえ込んで場をおさめる。むつとした矢島が遠ざかるのを見送って、相馬は額の汗を拭いた。

「おい、狂咲。お前な、もう少し俺の立場も考えろよな。支店でトラブって、あとで蹴寄せを食らうのは俺なんだから」

「知りません、そんなこと」

舞は本当に怒っていた。「俺の立場？ 結局、考えているのは自分のことばかり。

そんなことじゃ、銀行はいつまで経っても良くならないわ」

「おい、そう怒るな。しょうがねえだろ、俺にだって……」

相馬の言い訳など最後までできかず、グループ毎に集まって朝礼を始めようとする輪の中に舞は入っていった。

最終日のその日、舞は内村のいる相談グループに指導に入った。

「よろしく願います」

内村にいうと、疲れたような笑みが返ってくる。今年三十五になる内村は、舞よりも一回り年輩だ。

相談グループの窓口担当は二人。その二つ並んだ窓の中央にいて二人の仕事ぶりを見た舞は、やがて内村の仕事ぶりに感嘆の吐息を漏らした。

内村の事務には隙すきがない。客さばきも事務処理のスピードも、舞が思わず見とれるほどの完璧かんぺきさだ。

「一緒に食事、行きませんか」

午後十二時を回ったとき、内村から声をかけてくれた。食事は二交代。もうひとりのテラー、戸山香かおりが早番、内村と舞が遅番。遅番の食事タイムは、午後十二時半からの一時間だ。

支店の三階にある食堂で並んで食べ、それから支店を出た二人は喫茶店に入った。外でお茶をしようと誘ったのは舞だ。銀行では業務時間中の外食は原則禁止。相馬に見つかれば文句のひとつも出るだろうが、店内の休憩室で本音はきけない。

駅のロータリーが見下ろせるテーブルにつくと、内村はもっていたポーチからタバコを取り出して吸った。一本目を吸い終わるまでとりとめもない話をしていると、彼女のほうから切り出した。

「裁判のとききたいんじゃないの、花咲さん？」

「いえ、そのことは私にとつて重要じゃないんです」

舞の言葉に、内村は少し驚いたようだった。

「重要じゃないって？」

「誰にだってミスはあるじゃないですか。それがたまたまこういう結果になった。それだけです。ミスをしない人はいませんから」

「ありがと。慰めてくれてるわけか」

「いえ。本心でいってます」

舞のさつぱりした口調に、思わず内村にも笑みがこぼれた。

「じゃあ、あなたにとつての重要な問題って何なの」

「それはやつぱり、ベテラン行員が辞めさせられたことでしょう」

内村から笑みが消え、暗い表情に戻る。彼女にとつても、それはなんらかの心の傷になつてゐるのだろうと舞は推測した。

「そのために支店がばらばらになつた。違いますか。事務過誤が出たのは行員の技術の問題とは別なところに原因があるような気がするんです。要するに、みんながこの支店というか、銀行という職場に失望してしまつたような、そんな印象を受けます」

「朝、支店長と話してたでしょ」

「あ、見られちゃいました」

舞は舌を出した。

「そりやそうよ、いくら片隅でも、あんなに大きな声でやりあつてたら誰にだつてきこえるつて。内緒の話は、もつとお静かに」

「すみません」

「でも、うれしかった」

舞ははつと顔をあげた。「いままで支店長にあんなふうにいってくれた人、いなか
ったから」

内村のつぶやきは、しみじみと舞の心に染み込んでくる。

この内村もまた、四級職だ。彼女に対する中西の風当たりが強いのはそのせいなのだ。それに自分のミスが重なった。いまの内村は、吹きすさぶ吹雪ふぶきをじつと体を固くしてやり過ごそうとしているように見える。

つらいだろう。彼女の気持ちを考えると、舞の心は痛んだ。

「変わるかしら」

ふと内村はつぶやく。「前みたいに居心地のいい職場に戻るかな」

「内村さん……」

彼女の目にうつすらと涙が浮かんでいるのを見て、舞はなんといいかかわからなくなる。

変わりますよ、きつと——そんな気休めをいっても仕方がない。だけど、変えていかなきゃならないことは確かだ。

「変えるべきなのは、この銀行の体質かもしれないわね」

内村はつぶやいた。「それを考えると気が遠くなる。私ひとり、こんな抵抗したと

ところで、しよせん、何も変わりやしない。そう思うと淋しいよ、ほんとに。結局のところ、私たち女子行員って、やがて結婚して退職することが前提になってるのよね。いくら仕事がんばったって、支店長や課長にしてみればコストの高い部下に過ぎない。収益至上主義だもんね。邪魔者なんだよ」

「そんなことはないと思います」

内村の言葉になにかひつかかるものを感じたが、それがなにかわからないまま、舞はいつた。

「邪魔者じゃありません。コストを削減することと、嫌がらせをして女子行員を辞めさせることは全く別の問題だと思います。そもそもコストって売上げに見合うものでしょう。であれば、売上げを増やせばいいじゃないですか。それは支店長の仕事は 아닙니다。ところが、自由が丘支店は、競合他行に惨敗。支店長は実力不足をコストのせいにしていただけなんです」

「でも、それを誰が証明するの？ 誰が、支店長にむかって有罪を宣告するの。誰が、辞めていった仲間たちをフォローしてくれるの」

内村の問いは問題の核心をついていたが、回答のないまま宙ぶらりんになる。

「それは……」

私になんとかします、とはいえない。唇を噛んだ舞は、「でも、あきらめないでください」というしかなかった。

「私も辞表を提出してるんだけどね」

意外な言葉に、舞は息をのんだ。「でもね、裁判の件があるでしょ。だから、辞めさせてくれないのよ。私が辞めると知った途端、支店長も課長も、なんとか損失を私ひとりのせいにしようといまやつきになつてる。不謹慎かもしれないけど、いい気味よね」

そのときの内村の目に、女の怨念おんねんが宿つた。身震いするようなその情念にとりつかれたように、舞もまた、この支店が抱える問題の奈落へと転落していくような気がした。

7

「ご苦労さん。なにか話、きけたか」

支店に戻ると、相馬はミーティング・ブースのテーブル一杯に伝票を広げ、支店外へ出たことを注意するでもなく、いった。

「ええ。少なくとも支店が抱えている問題についてはわかりました。あとは解決策です」

「あの支店長はかなりのクセ者だぞ」

伝票の綴りをひっくりかえし、処理状況を確認しながら相馬はふとつぶやいた。

「どういうことですか」

「さつき本部の知り合いにきいてみた。ここに来る前、真藤部長の下にいた男だ。企画部出身のエリートつてところか」

「真藤？」

「企画部長を兼務する執行役員で、将来の頭取候補といわれている人さ。ま、きのう今日、本部に来たお前が知らないのも当然だが、名前ぐらいはきいたことあるだろ」

「そういえば」

舞はいい、「なんでそれが、クセ者なんですか」ときいた。

相馬は手をとめ、見せたこともないような真剣な表情になって舞を見つめた。

「コスト削減は、たぶん真藤部長の指示だ」

「どういうこと？」

「自由が丘支店つてのは、立地はいいんだがコストが高いつてんで、矢島が送り込ま

れたらしい。企画部時代の矢島は、コストカッターといわれて、冷酷無比の経費削減を断行したことで知られた男だ。それに、本部では、自由が丘支店を、中小法人に特化した戦略店舗として新装開店させる話が進んでいるそうだ。その際には、いまこの店にいる行員は全員、異動になる。要するに、そのための地均じならしみたいなもんなんだよ。つまり奴やつは、この支店をぶっ壊しにきたってわけだ」

「ひどすぎる」

舞は沸き上がってくる怒りに体を震わせた。

「真藤部長のやり方には、行内にも行き過ぎの声はある。ただ、いま当行に欲しいのは収益だ。その一事だけで、正当化されている一面は否いなめないだろうな」

「だからといって、やっていいことと悪いことがある。こうしたやり方が疑問だということとは、きちんと報告書に書くべきだと思います」

「書くさ、当然。だが、部長の後ろ盾があるんじゃないや、矢島支店長にしてみりや蛙かえるの面にしようべんつてやつじゃねえのか」

どうしようもなく、悔しい。その悔しさに新たな疑問が加わったのは、再び相談グループに戻ったときだ。

未決裁箱に入っていた伝票。その日受け付けた定期預金の中途解約の伝票だった。

処理者は、内村。金額は五百万円、住所と氏名が記された伝票には運転免許証番号が本人確認資料として添えられている。

免許証番号、か……。ふと舞の胸に疑問が宿った。

抵抗。さつき、内村はそういった。そのときなにかが胸にひつかかった。そのなにかがいまわかった気がした。

地下にある書庫に降りた。誤払い事件以前のもも含め、舞が調べたのは、定期預金の中途解約伝票だ。二年分の綴りを出し、指が汚れるのも構わず、片っ端から目を通した。

最後の伝票を見終えた舞は茫然^{ぼうぜん}として顔を上げた。

この二年間で、内村が処理した定期預金の中途解約で、確認資料として「健康保険証」の番号を控えたものは一つもない。すべて運転免許証か、パスポートだ。

単なる偶然だろうか。

地下にある書庫から、閉店直後の営業室に上がった舞は、手際よく窓口の現金を照合している内村の見事な手さばきをしばらく見ていた。臨店指導という立場にある舞でもおそらく太刀打ちできない。非の打ち所のないほど水際だった仕事ぶりだった。

そんな彼女が、果たして誤払いを犯すだろうか。

いや、人間なんだからミスすることはある。さつき自分自身、そういったはずなのに、いま舞はその言葉が信じられなくなっていた。

「あの、内村さん。ひとつきいていいですか」

一万円札の束を数えている内村に、舞は小声できいた。どうぞ、と目で返事がある。

「裁判になつていいる誤払いの件なんですけど、店頭にきた犯人はどうして運転免許証を呈示しなかつたんでしょう。内村さんなら、健康保険証ではなくて免許証を見せて欲しいと思うんですけど」

内村は手の中の札束から視線を逸そらさないでこたえた。

「さあ。なぜかしら。人間つて、たまに魔が差すときがあるものよ。たぶん、そのときの私は免許証より健康保険証のほうがいいと思つたんでしょ」

嘘うそだ。そんなはずはない。

あの定期預金の解約を受け付けたとき、内村は、相手の素性を疑つたはずだ。けど断ろうとせず、あえて中西の判断を仰いだ。

その判断ミスの責任を中西にも負わせることで、一矢を報いようとした——。それがこの誤払いの真相ではないのか。彼女の抵抗ではなかつたのか。

いま誤払いの責任は彼女ひとりに押しつけられようとしている。いま内村が本当に闘っているものがなんなのか、このとき舞ははじめて理解できた気がした。

「私にも、お手伝いできると思います。あなたの抵抗に」

舞はいつたが、内村から返事はなかった。ただ、札を数える指先が規則的に乾いた音を立て始めただけだ。